

【論文】

ルーブリック開発に関する実践的研究 — 初年次教育科目『山口と世界』を中心に —

林 透・星野 晋

要旨

2012年に公表された中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』では、学生の主体的な学びの促進とともに、個々の学生の学修成果の把握に焦点が注がれている。具体的には、学修到達度調査、学修行動調査、ルーブリックの活用などが例示されているが、高等教育分野におけるルーブリックの組織的な導入・活用実績は少なく、関連する実践的研究は不十分である。本研究では、共通教育改革の一環として開設された初年次教育科目『山口と世界』を対象に、2013年度から2014年度にかけて、コモンルーブリック開発を行った目的や手法を提示しながら、その開発プロセスを通して得られた実践知や課題について明らかにする。さらには、成績評価におけるルーブリック活用の授業実践について取り上げ、学士課程教育における新しい学修成果測定の可能性を探る。

キーワード

ルーブリック，学修成果測定，アクティブラーニング，初年次教育

1 はじめに

1.1 時代背景と問題設定

中央教育審議会（2012）は、大学教育の質的転換を求め、学生の学修成果の把握を重要課題として掲げている。具体的には、「成熟社会において学生に求められる能力をどのようなプログラムで育成するか（学位授与の方針）を明示し、その方針に従ったプログラム全体の中で個々の授業科目は能力育成のどの部分を担うかを担当教員が認識し、他の授業科目と連携し関連し合いながら組織的に教育を展開すること、その成果をプログラム共通の考え方や尺度（「アセスメント・ポリシー」¹⁾）に則って評価し、その結果をプログラムの改善・進化につなげるという改革サイクルが回る構造を定着させることが必要である」とし、各大学におけるアセスメント・ポリシーの明示の必要性を迫っている。さらに、

学修成果測定の具体的な手法についても言及があり、「成果の評価に当たっては、学修時間の把握といった学修行動調査²⁾やアセスメント・テスト（学修到達度調査³⁾）、ルーブリック、学修ポートフォリオ等、どのような具体的な測定手法を用いたかを併せて明確にする」ことが求められている。

学修成果測定の一手法として提示されたルーブリックとは、「学修評価の基準の作成方法の一つであり、評価水準である『尺度』と、尺度を満たした場合の『特徴の記述』で構成される。記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難なパフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがある」（中教審答申・用語集）とされ、表1のように「規準・レベル・記述語」から構成される。

表1 ルーブリックの基本形（一例）

	レベル3	レベル2	レベル1	レベル0
規準1
規準2
規準3

記述語

1.2 先行研究等

日本の高等教育分野においてルーブリックの活用が言及され始めたのは、先に示した中央教育審議会（2012）の議論を通してである。初等中等教育分野においては実践事例が多いが、高等教育分野では、松下（2012）、沖（2014）を始めとした論考のほか、Dannelle D. Stevens & Antonia J. Levi, (2012) により、ルーブリック活用に大きく脚光が当たるようになってきている。

また、アクティブラーニングの促進に伴い、溝上（2014）が「アクティブラーニング型授業は、知識の習得だけでなく、技能・態度（能力）の育成まで含めて・・・（中略）・・・『関心を向ける』『学び方を学ぶ』といったような、広く人格的・人間的成長にまでわたる学習成果が求められるようになってきている」

「アクティブラーニング型授業が基本的な活動として求める、書く・話す・発表するなどの活動を、技能や態度としてアセスメントする場合にも、ルーブリックは有用である」と言及し、アクティブラーニング型授業におけるパフォーマンス評価手法としてのルーブリックへの期待が高まっている。

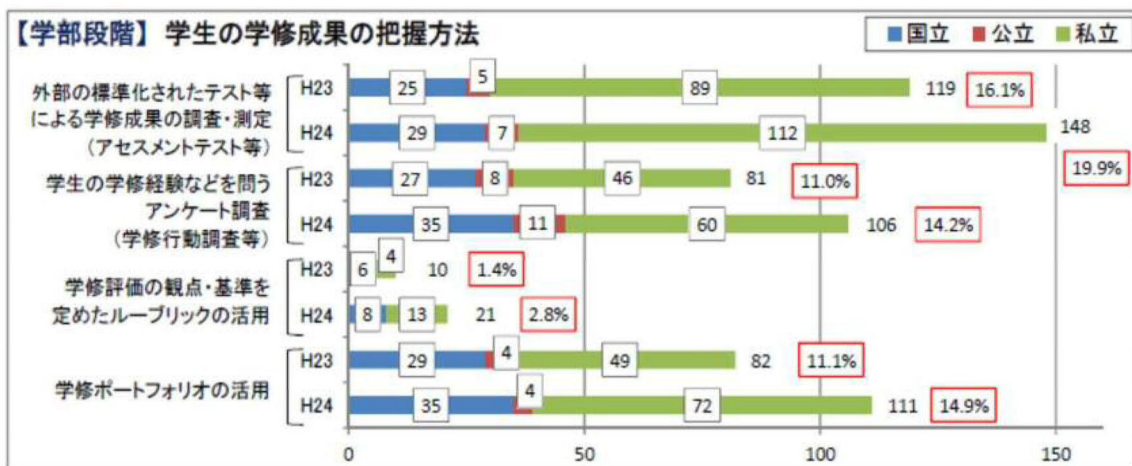
なお、日本の高等教育分野におけるルーブリックの組織的な導入実績については、図1に示すとおり、依然として少ない状況にある。本稿のような実践的研究の蓄積を通じたルーブリック活用の普及が求められている⁴⁾。

2 コモンルーブリック開発プロセス

2.1 山口大学共通教育改革と大学教育学会課題研究との連関

山口大学では、大学教育学会における課題研究「学士課程教育における共通教育の質保証」⁵⁾との連携により、今年度新設科目『山口と世界』を対象として、新たな学修成果測定の開発を進めることとした。

2013年度からの共通教育改革において、「新しい共通教育」を導入し、全教員出動体制から全部局責任体制への業務分担や責任体制に改編した。共通教育の履修が全学部生統一となり、共通教育科目がパッケージ化されたことにより、特定科目におけるルーブリッ



(※)大学院大学23大学(国立4大学、公立2大学、私立17大学)は対象外。

図1 学生の学修成果の把握方法（文部科学省 2014, 55）

ク開発・活用（直接評価）や初年次・高年次における学修行動調査（間接評価）を組織的に実施できる環境が整った。中央教育審議会答申が求める学修成果測定の実施の必要性と絡めながら、学士課程教育における共通教育の再考の変革期を狙い、「新しい共通教育」を内実化させるための評価ツールの導入と専門教育との接続性を意識付ける全学的な学習目標の設定に力点を置くことに取り組んでいる。

大学教育学会課題研究では、アメリカの AAC&U (Association of American Colleges & Universities) の VALUE ルーブリック⁶⁾を参照しながら、「大学間の壁をこえたメタルーブリックの開発」を目指している。VALUE ルーブリックがアメリカ国内の数多くの大学での 20 年以上に及ぶ評価実践をもとに共同開発されたことを踏まえながら、本課題研究においても、本学を含めた複数の個別大学・部局でのルーブリック開発・実践の事例の蓄積に取り組んでいる。松下（2014b）は、表 2 のとおり、メタルーブリックの開発可能性がある領域を整理しており、山口大学のフィールド提供の位置付けが分かる。

表 2 山口大学のフィールド提供の位置付け
(松下 2014b, 66)

関連する学習成果	文章コミュニケーション	問題解決	市民としての社会参加	グローバルな学習
新潟大学歯学部				
島根大学ほか				
名古屋商科大学				
山形大学				
山口大学				

松下（2014a）に拠れば、以下に示すとおり、①メタルーブリック、②コモンルーブリック、③科目ルーブリックの 3 つの階層がある。本学では、『山口と世界』のコモンルーブリックについて、VALUE ルーブリックを参照しながら作成し、コモンルーブリック

（共通性）と個々の科目ルーブリック（多様性）を関連づけることを考慮し、取り組むこととした。具体的な取組については次節において紹介する。

- ①メタルーブリック：各大学でのルーブリック開発のリソースになる、大学間で共有されるルーブリック（例：VALUE ルーブリック）
- ②コモンルーブリック：特定の大学内で共有されるルーブリック（例：関西国際大学）
- ③科目ルーブリック：個々の授業科目で用いられるルーブリック（例：新潟大学歯学部）

2.2 初年次教育科目『山口と世界』におけるコモンルーブリック開発

2013 年度からの共通教育改革において、教養コア系列科目を新たに設定し、課題探求型アクティブラーニング科目として『山口と世界』が開設されることとなった。『山口と世界』は全学部 1 年次必修科目（工学部のみ 2 年次開講）として設定され、所属組織が異なる 30 名以上の教員が担当している。

開設当初の課題として、シラバスの雛形が提示され、授業科目の一般目標の共有のみに留まる現状があった。このため、全学必修科目として、学生に保証すべき評価基準の明示が不可欠であり、各授業担当者の教育内容・手法を尊重しながら、共通化すべき規準の抽出と共有が必要であるという問題意識があった。このような背景から、『山口と世界』についてコモンルーブリックを開発することが効果的であると考えた。

大学教育センターでは、大学教育学会課題研究へのフィールド提供を通して、コモンルーブリック開発に関するコンサルテーションを受けることを提案し、具体的な FD ワークショップの企画実施に漕ぎ着けた。『山口と世界』授業担当者を中心とした FD ワークシ

ワークショップを【試作】⇒【開発】⇒【活用】⇒【検証】という4つのフェーズで区分整理し、2013～2014年度にかけて、以下のようなスケジュールで実施した。その過程において、コモンルーブリックを策定し、ルーブリック活用に関する基本的な考え方を提示することを実現した。

【フェーズ1：試作】

2014年3月5日

FDワークショップ(WS)

『山口と世界』コモンルーブリック試作

【フェーズ2：開発】

2014年7月31日

コモンルーブリック開発WS

『山口と世界』コモンルーブリック

(案)の提示と意見交換

2014年9月上旬

『山口と世界』コモンルーブリック策定

【フェーズ3：活用】

2014年9月24日

コモンルーブリック活用WS

『山口と世界』におけるルーブリック

活用実践準備

2014年9月下旬(後期授業開始)～

『山口と世界』コモンルーブリック活用

【フェーズ4：検証】

2015年2月27日

ルーブリック事例報告WS

『山口と世界』ルーブリック事例報告

2014年3月開催のFDワークショップでは、授業担当者同士が5つのグループに分かれ、コモンルーブリックの試作品(5作品)を作成した。この試作品を基に、大学教育センターにおいて、『山口と世界』コモンルーブリック(案)を作成の上、同年7月開催のコモンルーブリック開発WSに提示し、策定に向けた意見交換を行った。この意見交換を通して、「コモンルーブリックの規準の記述内容について、初年次教育科目のレ

ベルに適合するよう調整」「実際の運用面の諸課題としての、①グループ評価と個人評価のあり方、②成績評価への活用方法のあり方、③コモンルーブリックを基に、教員個々が使用する際のローカライズのあり方」を考慮することとした。複数回のワークショップを通じた調整作業を経ながら、同年9月上旬には、「発見する」「はぐくむ」「かたちにする」「分かちあう」「振り返る」の5つの規準からなる『山口と世界』コモンルーブリックを策定し、これに合わせて学習目標を設定しなおした(別表参照)。さらに、ルーブリック活用にあたっての基本的考え方を以下のとおり整理し、授業担当者に対して提示した。

- ①成績評価において、ルーブリックを活用した評価のほか、教員の裁量枠を認める。
- ②個々の教員が、ルーブリックをローカライズして活用する場合、コモンルーブリックの5つの規準を必須とし、それ以外の規準項目を追加運用することを認める。
- ③初年次科目である『山口と世界』では、基本的スキルの修得が重要な学修目標であり、各規準における「レベル0」の扱いについては、最低ラインに達していない、すなわち、追加指導(追加レポートや改善指導など)が必要な状態であり、欠格扱いと見なす。
- ④ルーブリックの活用では、グループワーク・グループ発表等を通して、個人評価が難しいと判断される場合、グループ評価において適用し、レポート課題等の成果物での個人評価を兼ね合わせるなどの工夫を行うことが考えられる。

以上のように、『山口と世界』コモンルーブリックの策定に基づき、各授業担当者が自らのルーブリックをローカライズしながら活用する準備を整えることができた。

次章において、『山口と世界』のルーブリック活用に関する実践事例を取り上げ、各授業担当者レベルでの考察や課題に着目する。

3 ルーブリック実践事例を通じた探究

3.1 実践事例1 (担当: 星野)

3.1.1 ローカライズにあたって

『山口と世界』は全学部共通教育科目であるが、共通教育と専門教育の区分を採用していない国際総合科学部においては、4年一貫教育の柱である「課題解決科目」の一つと位置づけられている。ここで紹介する『山口と世界』の事例は、今後担当することになる国際総合科学部の学生を含むクラスを想定して設計したものである。

まずローカライズにあたって、『山口と世界』を、『地域理解・連携演習』、『課題解決演習』、『プロジェクト型課題解決研究』といった国際総合科学部で後に用意されている、より専門的な科目群の基本的な学習スタイルを学習する機会と位置づけた。コモンルーブリックの示す学習目標や5つの基準は、これらの科目群の学習目標や学習項目と基本的には一致しているが、よりメタレベルの学習項目を設定する必要がでてきた。それは次の3点に集約される。

- ①生涯学習を想定した、自発的な学習の学び方の学習
- ②「学びと創造のサイクル」の回し方の学習
- ③チームづくりのやり方の学習

コモンルーブリックにおいて設定された「発見する」「はぐくむ」「かたちにする」「分かちあう」「ふりかえる」という五つの基準は、独立した要素ではなく相互に関連し合っている。またふりかえて終わる一回性のプロセスではなく、「ふりかえる」から新たな「発見する」へとつながるサイクルを構

成する。あらゆる研究や社会実践や商品開発の基本型であるこのサイクルを、ここでは仮に「学びと創造のサイクル」と呼ぶことにする(図2)。

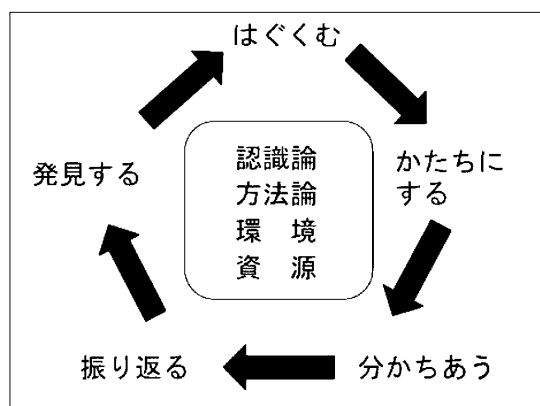


図2 学びと創造のサイクル

全8回の本授業において、とりあえず「学びと創造のサイクル」を一通り実際に回してみることによって、自分(たち)自身でサイクルを回す感覚を経験的に学習すること、将来の別の学習機会や社会活動においても自発的にこのサイクルを回せるようになることを目標に据えた。また実社会では、このサイクルを異なる文化的背景や専門性をもつ人からなるチームで回していくことになる。そこでチームづくりのやり方も同時に学ばなければならないと考える。以上を念頭に、次のように授業を設計した。

3.1.2 授業のデザイン

平成25年度と平成26年度合わせて2クォーター、各40名弱の1年生(教育・人文・経済混成)を対象に授業を担当した。5~6人の班分けをした上で、「山口のことを知らない人に、山口を知ってもらうために、インタビュー取材にもとづくリーフレットを作成すること、加えて別途スライドを作成しプレゼンテーションをする」という課題を与えた。授業のスケジュールは以下の通りである。

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 ミニ・レクチャー（知る）・
企画会議
- 第3回 企画会議
- 第4回 ミニ・レクチャー（シェアする）・
企画・編集会議
- 第5回 編集会議
- 第6回 編集会議
- 第7回 報告会
- 第8回 総括・ふり返り

初回のオリエンテーションでは、コモンルーブリックを提示し学習目標やタスクを確認した上で、班単位での自学自習が基本であること、ここでの学習が専門教育、さらには社会に出てからの仕事や活動にどのように発展することになるか等について解説した。

第6回までは、ミーティングや作業の進捗状況を各班1分間スピーチし、クラスで情報を共有した。

20分程度のミニ・レクチャーを2回はさみ、1回目の「知る」ではインタビュー取材のコツと倫理について、2回目の「シェアする」ではリーフレットやプレゼンテーションの構成の仕方について講義した。

報告会においては、報告班以外の班の学生が司会を担当し、また他班の報告とリーフレットを評価する形をとった。評価項目は、コモンルーブリックの基準との対応も意識して、テーマ設定・着眼点（10点）、取材力（10点）、内容の練度、魅力（20点）、プレゼン・リーフレットの工夫・説得力（20点）、主観的・総合的印象（40点）の合計100点とした。学生による評価において上位2班については成績評価にボーナス点を加算した。その2班とは別に、教員の目で総合的に見て「審査員特別賞」を一つの班に認定し成績評価にボーナス点を加算した。

最終提出物は、リーフレット、プレゼンテーション用のスライド、発表原稿、作業記録

の4点である。なお作業記録の項目は以下の通りである。

作業記録には、テーマ設定や取材計画、役割分担、取材結果、リーフレットの編集方針や報告の構成などを記録し、最後には個々のメンバーの果たした貢献、その成果についての反省点・改善案等をまとめるようにした。以上の学習プロセスを改めてコモンルーブリックと対応させると、表3のようになる。

表3 コモンルーブリックとの対応

規準	内容
発見する	予備調査（ネタ探し、既存のリーフレットの分析等） 山口に関連するテーマ設定、企画立案
はぐくむ	取材・取材結果の整理・編集
かたちにする	リーフレット、スライド、発表原稿の作成 作業シートへの記録
分かちあう	リーフレットの公開、プレゼンテーション
振り返る	他班のプロダクツの評価 自班のプロダクツの改善すべき点についての話し合い

評価は、個別評価はせずに班単位で行った。評価方法は、上述したようにリーフレットとプレゼンテーションに対する学生同士（班同士）の評価と教員による評価を総合した。

3.1.3 授業観察の結果

2年間2回の授業を観察した結果、適切な動機付けに成功したならば、学生たちは自発的に試行錯誤・創意工夫しながら学習を進めていけることが確認できた。たとえば萩の商店街の活性化イベントを取材した班、山口市の商店街で「聞き屋」というボランティア集団に出会い取材した班など（図3）、積極的に学習を組み立てていく班が見られた。その一方で、近場で済まそうとする安易な選択をする班もあった。学生の自発性にゆだねるべ

く、あえて介入的な指導を避けたが、その自由度を活かし学習を楽しめる班と自由度に戸惑い学習を発展させていけない班に分かれたということである。

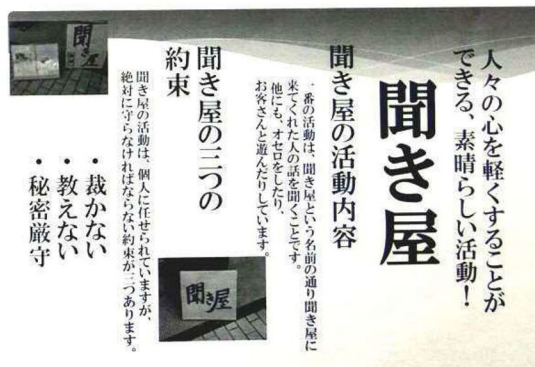
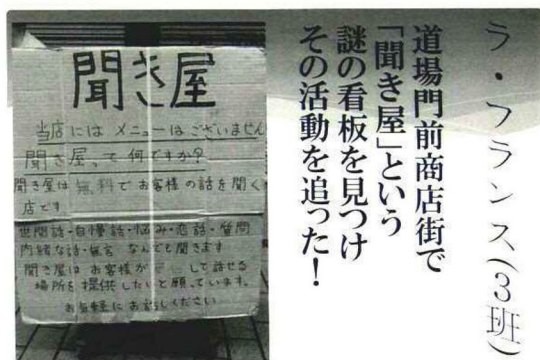


図3 リーフレットの例(聞き屋)

班によって、5つの基準のどこが充実しているかも異なってくる。取材は不足しているがレイアウト等で完成度の高いリーフレットを作成した班、内容は平凡でもプレゼンテーションで他班からの高い評価を得た班、取材と分析は優れているがプレゼンテーションでそのことを活かし切れなかった班などである。その点を踏まえて、教員による総評において、各班の優れた点・不足している点を示し、将来同様の学習機会があった場合に自班についての反省が活かせるように指導する必要がある。

40名弱のクラスでは、個々人のアクティビティについてきめ細かい観察・評価はできないが、班ごとのアクティビティは観察可能

である。内容の濃い取材や分析ができた班や魅力的なリーフレットや報告ができた班は、チームづくりに成功し、取材やプロダクツの作成を楽しめた班である。そのことから、この規模のクラスでこのスタイルの授業を構成する場合、教員はワクワク感を煽る動機付けとチームづくりに重点をおいた指導をすることが重要であると確認できた。

なお、平成25年の担当クラスにおいて授業評価のアンケート(n=35)を実施したが、この授業は「おもしろかったか」、「有意義であったか」、「今後在学中の学習に役立つと思うか」、「将来社会に出て役に立つと思うか」といった質問すべて、97%の学生が「そう思う」「ややそう思う」と答えた。

3.1.4 今後の課題

チームづくりの成功が学習効果と深く関わっていることが確認されたことから、「チームづくりのやり方」の指導方法をさらに充実させる必要があると考える。この2回については、フリーライダーは発見できなかったが、今後フリーライダーを生まないようなチームづくりをどのように促すか、コミュニケーションが不得意な学生を含むチームをどのように指導するかなどを想定しつつ、新たに「チームづくりのやり方」についてのミニ・レクチャーを導入する、チームづくりが上手くないっていない班に適度な介入を行う方法などを検討していきたい。

ルーブリックについては、これがあらかじめ提示されていることによって、学生がこの授業で何をなぜ学習するかを理解でき、班やクラスでミッションを共有できるという点で意義が認められた。しかしその一方で、個々の基準が求めるパフォーマンスや能力を具体的な成績評価に落とし込んでいくのは難しいと感じた。少なくとも基準ごとの評価の総和ではなく、それらがいかに統合されてプロダクツに結実しているかということの評価すべ

きであろう。上述したチームづくりの評価を含めて、ルーブリックの構成や具体的な評価の手法についてはさらなる検討が必要であると考え。

3.2 実践事例2 (担当：林)

3.2.1 授業設計のコンセプト

筆者は、『山口と世界』開設時の2013年度から後期の第3・第4クォーターで当該授業を担当している。各クラスサイズは40名前後である。

『山口と世界』は、授業担当者間共通の一般目標として、「課題探求型の能動的学修をとおして、山口県の歴史、文化、経済、産業、自然、教育など身近な地域の特色を知り、地域社会の発展に寄与する能力や態度を身につけるとともに、それらの資質を将来所属する地域や国際的環境で活かす力を養う」とあるが、担当授業では、「地域に学び、世界を知る」をテーマに、自身の専門分野である高等教育論を題材に、山口大学の歴史を学ぶ自校教育を通して、山口大学生としてのアイデンティティを高めるとともに、世界の大学システムと比較しながら、異文化の理解を深めることを目標に掲げている。

修得すべきスキルとしては、授業テーマに則して、「読み、書き、発表する力」を育成することを目指し、以下のような授業設計となっている(図4参照)。

- 第1回 オリエンテーション (グループワークにおける基本的な心構えの教示)
- 第2回 山口大学の歴史について考える (1) (講義中心)
- 第3回 山口大学の歴史について考える (2) (講義中心)
- 第4回 世界の大学について考える (1) (教科書『若き数学者のアメリカ』読後感ペアワーク)

- 第5回 世界の大学について考える (2) (ワールドカフェ)
- 第6回 グループ発表 (1)
- 第7回 グループ発表 (2)
- 第8回 授業の振り返りと総括

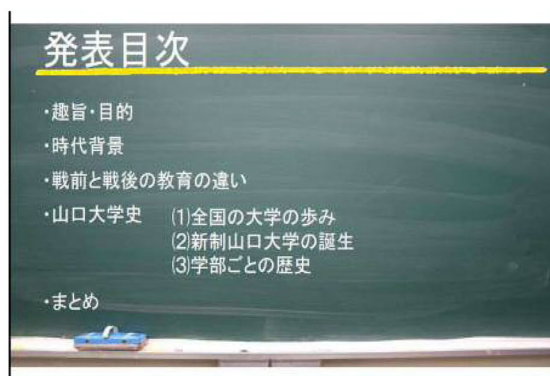


図4 グループ発表資料表紙の一例

3.2.2 コモンルーブリックからのローカライズ化

前章で紹介した『山口と世界』コモンルーブリック開発プロセスにおいて、他の授業担当の授業設計について直接話を聞く機会を得るとともに、ルーブリックにおけるパフォーマンス評価の意味を認識し、自らの『山口と世界』授業設計について省察し、見直しを図ることを検討した。

2013年度においては、授業回前半を山口大学の歴史を学び、発表する機会、授業回後半を世界の大学等を学び、対話する機会と位置づけており、山口大学の歴史に関するグループ発表を第4回・第5回の授業に配していたが、授業全体における重要なパフォーマンス評価対象という認識から、グループ発表を第6回・第7回に移動した。

上記の授業設計の変更を踏まえながら、ルーブリックのローカライズを行った。コモンルーブリックで規定した5つの規準に基づき、学生のグループ発表を評価することとした。評価点については、「レベル3：19～20点」「レベル2：17 or 15点」「レベル1

表 4 (ルーブリックによるパフォーマンス評価のための) 共有シート

(ルーブリックによるパフォーマンス評価のための) 共有シート

授業科目『山口と世界』の共通目標
 チームで、山口に関連する課題・テーマを設定し、情報を収集し、分析し、解決策や企画をまとめ、口頭や紙媒体(もしくは映像やWeb)で発表し、地域や国際的環境で活かす力を養う授業。
 アクティブ・ラーニングを通して、研究や社会実践の基本的なプロセスについて、学習の仕方やサービリティラーシーの基本を学習することが目的である。

		【グループ番号】	【所属・氏名】
規準	内容	グループワーク・プレゼンテーションを通した個人ポートフォリオ	
発見する	山口大学の歴史に関連するテーマ設定、企画立案	【あなたは、グループにおいて、山口大学の歴史に関連するテーマ設定、企画立案に関し、どのように取り組みましたか。具体的に記入してください。】	
はぐくむ	テーマ設定、企画にもとづく情報収集およびコミュニケーション	【あなたは、グループにおいて、テーマ設定、企画にもとづく情報収集およびコミュニケーションに関し、どのように取り組みましたか。具体的に記入してください。】	
かたちにする	編集、作品化、発表資料、レポート等、プロダクツの作成	【あなたは、グループにおいて、発表資料等のプロダクツの作成に関し、どのように取り組みましたか。具体的に記入してください。】	
分かちあう	公開、プレゼンテーション、チームワーク	【あなたは、グループにおいて、プレゼンテーションやチームワークに関し、どのように取り組みましたか。具体的に記入してください。】	
振り返る	他者および自分(たち)の企画およびプロダクツの評価。今後の地域や国際的環境での「発見する」につながる。	【あなたは、グループにおける企画、発表資料、プレゼンテーションに関し、どのように評価し、振り返りを行いましたか。具体的に記入してください。】	

：12～13点」とした。コモンルーブリック開発プロセスにおいて、最も意見が多かった個人観察に基づいた評価の困難さについては、独自に共有シートという様式(表4)を設けて、定性的記述による個人評価が行えるように措置した。

3.2.3 授業実践を通して

ルーブリック活用に伴い、授業開始時の授業目的と成績評価のあり方について、学生により詳細に説明を加えることができたと感じている。特に、共有シート(個人パフォーマンス)を記入させることを通して、学生のルーブリック理解の自覚化を促すとともに、成績評価者がグループワーク及びグループ発表における学生個々人の教室内外でのパフォーマンスを詳細に理解することができるようになった。従来は、グループ発表について、教員とグループメンバー以外の学生による他者評価の仕組みにおいて判定し、グループとしての評価に偏り勝ちであったが、個々人のパ

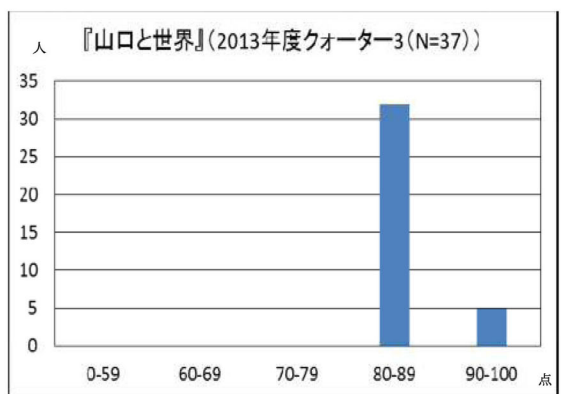


図5 『山口と世界』成績分布(2013年度クォーター3)

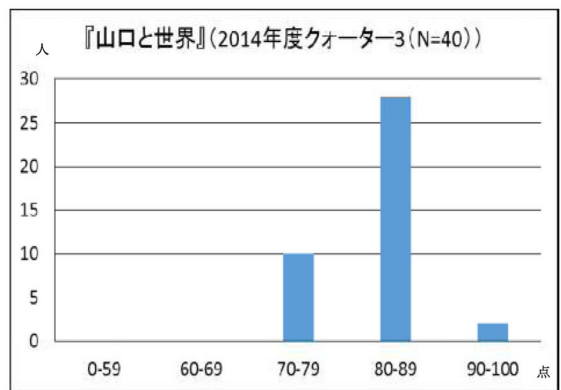


図6 『山口と世界』成績分布(2014年度クォーター3)

パフォーマンスをより適正に評価することが可能となった（図 5・6 参照）。

教員側の授業設計の観点においては、ルーブリックの規準に基づきながら、授業実践の各場面を省察し、改善充実していく効果を自覚することができた。

3.2.4 今後の課題

授業実践において、ルーブリックを活用することは、学生に対して成績評価に関する詳細を提供することが出来、学生との信頼関係を高める上で、有意義であると実感している。ルーブリックに関する学生の理解度や反応ぶりについて、質問紙調査又はクリッカーでの意識調査を行ってみるべきではないかと考えている。

ルーブリック活用は、シラバスで明示した成績評価と連動して捉える必要性を痛感している。2014 年度については、ルーブリック活用自体を後発的に実施したため、十分な考慮を施すことが出来なかった点が今後の課題である。2015 年度以降において、成績評価基準とルーブリックとの整合性を図っていききたい。また、これに関連して、成績評価基準とルーブリック規準の観点の違いをいかに分かりやすく提示することができるかについても今後の課題である。

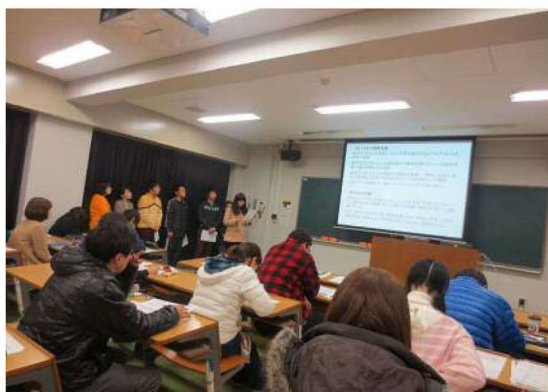


写真 グループ発表風景

4 まとめと考察

4.1 まとめ

初年次教育科目『山口と世界』を対象に、コモンルーブリック開発に取り組んだ。『山口と世界』は全学部必修のアクティブラーニング科目であり、新しい共通教育を象徴する科目である。コモンルーブリック開発当初、各授業担当者が一般目標を共有するのみで、授業設計に試行錯誤する現状が見られ、ワークショップを重ねることで、授業担当者間での到達目標の共有に貢献する結果となった。また、『山口と世界』コモンルーブリック開発を通して、他の科目に適用する実践知を獲得することができたと考えている。

本学では、2014 年度の文部科学省・大学教育再生加速プログラム（テーマⅠ・Ⅱ複合型）の採択を受け、ルーブリック開発・活用を共通教育や専門教育に促進する活動を展開していく予定である。ルーブリックの本来の目的は、学生の学修成果測定にあるわけであるが、授業担当者間の実質的対話のための FD ツールとして重要な役割を果たすことを実感しており、効果的な運用を図っていきたい。

4.2 考察

日本の大学教育は、1991 年の大学設置基準大綱化以降、シラバスの明示や授業評価アンケートの実施など、学生の学びに配慮した質的転換が図られてきたと言えよう。この時期を質的転換の第 1 ステージと位置付けるとすれば、2012 年の中央教育審議会答申を踏まえた昨今の動向は質的転換の第 2 ステージと称することができるであろう。

2011 年の教育活動に関する情報公表の義務化に伴い、各大学におけるシラバスが公表され、参照できる環境にある。学生が最も関心を抱く成績評価基準の明示にも一定の厳格性が伴ってきていると言える。しかし、今日において、成績評価の配分割合の背後に備え

ておくべき評価規準表が問われているといっ
て過言ではない。

第 1 章で言及したが、実際の大学教育の
現場でのルーブリック活用の実績は未だ少な
い状況にある。本学においても、数年前から、
アラカルト研修の一環として、ルーブリック
活用に関する研修機会を提供しているが、実
践事例が蓄積されているとは言えない。今回
の実践的研究を通して、ルーブリック活用を
組織的に行っていく上で、幾つかの諸課題が
あるように感じている。

一つは、ルーブリック活用を組織レベルで
行うのか、個人レベルで行うかのスタンスの
あり方である。本来は、前者のスタンスが必
要であり、今回の『山口と世界』はその取組
に該当しよう。前者のスタンスでルーブリッ
ク活用するには、学部・学科単位又は科目群
単位での組織的対話が不可欠であり、大学教
育センターなどの FD 組織が継続的に関与す
る必要がある。人的かつ時間的な負担がか
かるが、取組自体に一貫性が生まれ、継続性
を維持しやすいと考える。

もう一つは、学生への明示のあり方である。
ルーブリック活用を組織的な取組とするので
あれば、シラバス等での明示方法の調整が必
要であろう。個々の教員が各担当授業におい
て学生に明示するという仕方では継続性は十
分に担保することはできないであろう。大学
としてルーブリックをどのように導入してい
くかという方針（ポリシー）の明示が必要に
なってくるように思われる。

以上のように、ルーブリック活用を定着さ
せるには、個々の授業科目群におけるルーブ
リック開発を進めるとともに、成績評価に関
する学生への明示の水準を詳細化する組織的
戦略が必要であろう。

5 おわりに

この実践的研究では、大学教育学会課題研
究へのフィールド提供の機会を得なければ、

迅速かつ効果的に取組を進めることができな
かったと考えている。この場をお借りして、
数多くの指導助言をいただいた京都大学高等
教育研究開発推進センター 松下佳代教授に
感謝申し上げたい。

(大学教育センター 准教授)

(大学教育センター 講師)

【参考文献】

- 中央教育審議会 (2012) 『新たな未来を築
くための大学教育の質的転換に向けて—生
涯学び続け、主体的に考える力を育成する
大学へ— (答申)』
- 林 透 (2014) 「山口大学におけるケー
ス・スタディ —質保証のためのマネジメ
ントに着目して—」 『2014 年度大学教育
学会課題研究集会発表要旨集』 pp.29-30
- 松下佳代 (2012) 「パフォーマンス評価に
よる学習の質の評価：学習評価の構図の分
析にもとづいて」 『京都大学高等教育研
究』第 18 号, pp.75-114
- 松下佳代 (2014a) 「学修成果の評価の方法
—ルーブリックと評価課題の開発を通して
—」 山口大学FDワークショップ基調講演
資料 (2014.3.5)
- 松下佳代 (2014b) 「共通教育における学習
成果の直接評価 —研究目的・研究計画・
進捗状況について—」 『大学教育学会誌』
第 36 巻第 1 号, pp.62-66
- 溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニング
と教授学習パラダイムの転換』 東信堂
- 文部科学省 (2014) 『大学における教育内
容等の改革状況について (平成 24 年
度)』
- 沖裕貴 (2014) 「大学におけるルーブリッ
ク評価導入の実際 —公平で客観的かつ厳
格な成績評価を目指して—」 立命館大学教
育開発推進機構『立命館高等教育研究』第
14 号, pp.71-90

Dannelle D. Stevens & Antonia J. Levi, (2012) *Introduction to Rubrics: An Assessment Tool to Save Grading Time, Convey Effective Feedback, and Promote Student Learning* (佐藤浩章 監訳, 井上敏憲, 俣野秀典 訳 (2014) 『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部)

【注】

- 1) アセスメント・ポリシーとは、「学生の学修成果の評価（アセスメント）について、その目的、達成すべき質的水準及び具体的実施方法などについて定めた学内の方針」（中央教育審議会 2012, 用語集）であり、学修成果測定を組織的に取り組む上において、各大学として定めておく必要性が高まっている。
- 2) 学修行動調査とは、「学生の行動や満足度に関するアンケートを基本とした調査。複数大学の学生を対象に共通の質問項目で調査を実施することにより、学部間・大学間の状況比較や、学年進行に伴う変化の把握、学内の他のデータ（成績等）と組み合わせることで各種の分析に役立てるために開発されたもの」（中央教育審議会 2012, 用語集）であり、日本においては、JCIRP（ジェイ・サーブ）などが代表例である。
- 3) 学修到達度調査とは、「学修成果の測定・把握の手段の一つ。ペーパーテスト等により学生の知識・能力等を測定する方法の総称で、標準化テストとも呼ばれる」（中央教育審議会 2012, 用語集）ものであり、日本でもジェネリックスキルを測定する標準化テストなどが開発・普及しつつある。
- 4) 2014 年度に実施した大学教育学会課題研究「学士課程教育における共通教育の質保証」における全国アンケート調査結果において、共通教育におけるルーブリックを用いた評価の実施に関する設問で、「実施している」と回答した割合は、6.7%に過ぎなかった。
- 5) 大学教育学会課題研究「学士課程教育における共通教育の質保証」の趣旨は、日本学術会議の分野別質保証の議論では欠落しがちな共通教育の質保証を主要な対象とし、また、質保証の要となる学習成果の評価に焦点をあてた研究を行うこととしている。
- 6) VALUEルーブリックとは、アメリカにおけるGeneral Educationに関する学協会AAC&Uが教養教育に関するルーブリックを共同開発したものであり、メタルーブリックとして各大学の質保証の取組に活用されている。